

大槻平泉の『大学』解釈

——『大学語脉解』写本の比較検討——

はじめに

仙台藩の儒者、大槻平泉は『大学』を「宇宙第一の書」と述べた。これは言うまでもなく、伊藤仁斎が『論語』を評した言葉を模したものであるが、朱熹が定めた『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』の四書の内、近世日本において、これほどまでに『大学』を重視した儒者が他にいたであろうか。

平泉が『大学』に着目した理由の一つは、彼が仙台藩藩校養賢堂の学頭として、大規模な学制改革を主導する立場であったことに関係している。平泉は学科の増設から、校舎の拡充、財政基盤の確立に至るまで、様々な改革を試みた。

平泉が行った養賢堂の学制改革についてはいくつかの先行研究があるが、その背後にいかなる思想的根拠があったかという点についてはこれまで議論されてこなかった。そこで、平泉が晩年に著した『大学』三部作の内の最後の一冊、『大学語脉解』に着目したい。『大学』を「宇宙第一の書」と評し、「万世不易の模範」とした平泉にとって、『大学』

阿 曾 歩

が彼の思想の根本的支柱となっていることは疑いない。『大学語脉解』に着目することで、平泉の思想的背景が明らかになり、さらには養賢堂の学制改革についての思想面の理解もより深まるであろう。本稿ではその足がかりとして、『大学語脉解』の成立過程について検討する。

第一章 大槻平泉と『大学』

一、大槻平泉とは

まず、大槻平泉の経歴を整理する。大槻平泉（通称民治、名は清準、字は子繩、平泉は号／一七七三～一八五〇年）は、磐井郡中里村（現岩手県一関市）に生まれ、志村東嶼²⁾に儒学を学んだ。

寛政三（一七九一）年、江戸に渡り、昌平黉で林述斎、柴野栗山、古賀精里の教えを受けた後、享和元（一八〇二）年に六十日間、享和三（一八〇三）年には約三年間に渡って諸国を遊歴し、様々な知識人と交流した。³⁾

文化五（一八〇八）年に仙台藩に戻ってからは養賢堂で講釈を務め、

翌年には養賢堂の学頭候補となり、学制改革に着手した。さらに翌年の文化七（一八一〇）年には正式に学頭に就任し、学科の増設や医学館・蘭学方の設置など、あらゆる改革を試みた。死去するまでの約四十年間、学頭の地位にあった平泉は、仙台藩の学問を考える上で最も重要な人物の一人といえる。

主な著作に、鯨の生態や捕鯨業について書かれた『鯨史稿』⁽⁴⁾、遊歴中の思索をまとめた『経世体要』⁽⁵⁾、前述の『大学』についての三部作がある。また著書序目によれば、『孟子語脉考』、『孟子経路考』など、『孟子』について書かれたものも多い。⁽⁶⁾博物学的な著作から、儒学に関するもの、さらに漢詩の著作も多数残っており、平泉が幅広い学識を有する人物であったことが伺える。

二、大槻平泉と『大学』三部作

天保一一（一八四〇）年に平泉により書かれたとされる『大学語脉解』の序文によれば、彼は『大学』三部作を『大学章句証義（以下『証義』とする）』、『大学章句諸説弁謬（以下『弁謬』とする）』、『大学語脉解（以下『語脉解』とする）』の順に著した。『証義』は先儒が既に述べたことを集めたもの、『弁謬』は先儒が述べた言葉の中で間違っていると思う点を指摘して弁駁したもの、そして『語脉解』は前二作で説ききれなかったことやさらに詳しく説くべきことを説いたものであると平泉は述べる。

この三部作のうち、現存するのは『証義』と『語脉解』のみで、『弁

謬』は管見の限り存在が確認できない。⁽⁷⁾『証義』は慶應義塾図書館に所蔵が確認されているが、経一章の途中で文が終わっており、それ以降の部分は無い。

本稿では、現在数種類の写本の存在が確認でき、かつ全章への注釈が揃っている『語脉解』に注目し、その諸本を比較検討することで『語脉解』の成立過程を明らかにし、底本となる一冊を確定する。

三、『大学語脉解』諸本所蔵先

現存している『語脉解』の所蔵先は以下の通りである。

- (一) 慶應義塾図書館所蔵 (175-941、175-942、175-943)
- (二) 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫所蔵 (ハ 22A-E22-1)
- (三) 東京都立中央図書館特別買上文庫坂本広太郎文庫所蔵（特

6323）

- (四) 東京大学総合図書館岡百世文庫所蔵 (B60-1653)
 - (五) 慶應義塾図書館所蔵 (210-60-1)
- これらの五種（七冊）の中で、特に重要なものは（一）と（二）である。次章ではそれらを中心に考察する。

また、関連する書物として、以下の三点を挙げる。

- ・『平泉著書序目』宮城県図書館所蔵 (KO121/ 4)
- ・『証義』慶應義塾図書館所蔵 (175-96-1)
- ・『大学章句補翼僭説・論語集註補翼僭説（以下『僭説』とする）』慶應義塾図書館所蔵 (175-95-1)

『平泉著書目』は、平泉の息子らによってまとめられたものである。⁽⁸⁾平泉の著書一覧と主要な書物の序文が記されており、『大学』三部作の書名や『語脉解』の序文も収められている。『証義』は、文章を推敲した跡があることから草稿とみられる。しかし、現存する『証義』はこの一冊であるため、貴重な写本である。『僧説』は、『大学』の内、伝の六章と十章についての補論である。『語脉解』の内容を検討する際には参照する必要があるが、本稿では扱わず、稿を改めて扱うこととする。

第二章 『大学語脉解』諸本の比較検討

一、稿本の存在

まず、(一) 慶應義塾図書館所蔵本 (175-94-1、175-94-2、175-94-3) について考察する。これは三冊が一つにまとめられたものである。

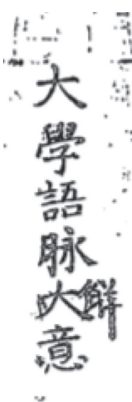
この三冊には、本文とは別に書かれた細かな字の書き込みや漢字の訂正といった推敲の跡がみえる。⁽⁹⁾後の諸本には誤字脱字の訂正はあるものの、文章の大幅な変更や注記はほとんど見られない。このことから、この三冊は稿本と考えられる。これを【稿本三冊】とする。⁽¹⁰⁾

さらに、慶應義塾図書館の請求番号に従い、175-94-1をA本、175-94-2をB本、175-94-3をC本とする。ただし、以下の理由により、書かれた順序はB本、C本、A本の順であると考えられる。

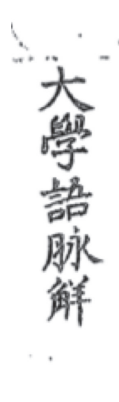
順序について

書名に着目すると、⁽¹¹⁾B本は当初「大学語脉大意」とされていたが、大意の「大」の字の隣に「解」の書き込みが加えられている(史料①)。一方、C本とA本の書名は「大学語脉解」である(史料②、③)。当初考えられていたものが変更されたと考えるのが妥当である。

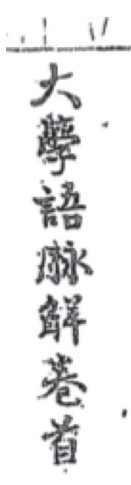
史料①【稿本三冊B本】



史料②【稿本三冊C本】



史料③【稿本三冊A本】



本文の異同にも注目すると、経一章の冒頭では、B本に見られる本

文右横の細字や頭注の加筆が（史料④）、C本では本文中に書き直されている（史料⑤、直された部分を傍線で示した⁽¹²⁾）。たとえば、B本頭注の「△昔人曾無識大學是古人為學次第者、二程実始知焉」が、C本では二度目の「二程実始知焉」の直後に挿入され、「昔人曾」から始まる三つの文が対句の形式で書かれている。

史料④ 【稿本三冊B本】

子程子曰一段

昔人曾無識大學是孔氏之遺書者、二程始知焉。昔人曾無識大學是初學入德之門者、二程實始知焉。故尊信之表章之、以爲講學第一書、而謀之居語孟之前、此序文所云實始尊信此篇而表章之、又爲次其蘭編而發其歸趣者、正謂此也。所以朱子隱括二程及大學之語、而爲一篇之文、首揭之以爲讀大學之法、

子程子曰一段

昔人曾無識大學是孔氏之遺書者、二程实始知焉。昔人曾無識大學是初學入德之門者、二程実始知焉。故尊信之表章之、以爲講學第一書、而謀之居語孟之前、此序文所云實始尊信此篇而表章之、又爲次其蘭編而發其歸趣者、正謂此也。所以朱子隱括二程及大學之語、而爲一篇之文、首揭之以爲讀大學之法、

〔※頭注〕△昔人曾無識大學是古人為學次第者、二程実始知焉

史料⑤ 【稿本三冊C本】

子程子曰條

昔人曾無識大學是孔子之遺書者、二程實始知焉。昔人曾無識大學是初學入德之門者、二程實始知焉。昔人曾無識大學是古人為學次第者、二程實始知焉。二程實始尊信之矣、二程實始表章之矣、實始以此篇爲講學第一書、而

子程子曰條

昔人曾無識大學是孔子之遺書者、二程实始知焉。昔人曾無識大學是初學入德之門者、二程実始知焉。昔人曾無識大學是古人為學次第者、二程実始知焉。二程実始尊信之矣、二程実始表章之矣、實始以此篇爲講學第一書、而

さらに、史料④B本左上の頭注の加筆を例に、この部分が、C本、A本とどのように推移するのか見てみよう。史料④左上には「楊龜山嘗論道千乘之國章曰」から始まる加筆がある。これがC本（史料⑥）では本文中に書かれている。ここでは、さらなる推敲として「清準謂」、「清準又謂」などの加筆が見られるが、こうしたC本での加筆は、A本（史料⑦）では本文中に書かれている。また、A本では「楊龜山」から始まる一文と「謝上蔡」から始まる一文の順序が入れ替わっているが、これは文意を通りやすくするための工夫であろう。A本でも「以」や「之」の脱字が見られるものの、以上のような加筆の反映の様子から、C本の後にA本が書かれたことがいえる。

史料⑥【稿本三冊C本】

楊龜山嘗論道千乘之國章曰是論其所存
未及為政朝鮮李退溪嘗言大學亦論其所
存可以為讀大學之法
謝上蔡嘗論鬼神云做此題目使人思議準
胡大學三綱八目亦皆做此題目以入思議
學者須先領此意然後治大學

清準謂楊龜山嘗論道千乘之國章曰、是論其所存、未及為政、朝鮮李退溪嘗言大學亦論其所存、當取以為讀大學之法。

清準又謂謝上蔡嘗論鬼神云、作此題目以入思議、準謂大學三綱八目、亦皆做此題目、以入思議、學者須先領此意、然後治大學。

史料⑦【稿本三冊A本】

清準謂謝上蔡嘗論鬼神言做箇題目以入思議如大學三綱八目亦皆做箇題目以入思議也學者須先領此意然後治大學
又謂楊龜山嘗論道千乘之國章曰是論其所存未及為政朝鮮李退溪嘗言大學亦論其所存當取以為讀大學之法

清準謂謝上蔡嘗論鬼神言、作箇題目以入思議、如大學三綱八目、亦皆做箇

題目以入思議也、學者須先領此意、然後治大學。

又謂楊龜山嘗論道千乘之國章曰、是論其所存、未及為政、朝鮮李退溪嘗言大學亦論其所存、當取以為讀大學之法。

次に、本文の構成に注目すると、B本・C本とA本では構成が異なっている。A本の冒頭には「大学語脉解卷首」があり、朱熹による「大学章句序」に対する平泉の注釈から始まる。一方、B本・C本は「子程子曰一段」（B本では「一段」ではなく「條」と、大学章句本編の注釈から始まり、「大学章句序」に対する言及がない。後にみる（二）から（五）の写本には、「大学章句序」への注釈があり、これらがA本の体裁に倣っていることから、C本の後にA本が書かれたことが明らかである。

また、奥書の日付も重要である。A本には、「丁酉十月起草戊戌正月脱稿卒業準記」とある（史料⑧）。B本とC本には日付はない。他の写本（二）、（三）、（五）には、「丁酉十月起草戊戌正月卒業」の文字と書かれている。A本で「脱稿」を「卒業」と直し、（二）以下がそれに倣ったのである。

史料⑧【稿本三冊A本】

丁酉十月起草戊戌正月脱稿準記

なお、A本に倣って(二) 斯道文庫所蔵の写本(以下【斯道本】とする) 他が作られた理由は次の通りである。「大学章句序」に対するA本の注釈は、A本内の他の箇所と比べて小さい文字で書かれており、行間以後から書き足されたものと思われる(史料⑨)。「斯道本」他にはこの注釈文が本文と同じ大きさで書かれていることからみて(史料⑩)、「【斯道本】」以下がA本に倣って書かれたことがわかる。

史料⑨ 【稿本三冊A本】

大學章句序
大學一也。或以明義。或以公言。其義。然書名本自載道術。則畢竟是歸制道。此序以教為骨。法為要。故篇中曰道。曰術。曰方。皆具去之字。字應去。方去之去。自一定成法而言。道。

史料⑩ 【斯道本】

大學章句序
大學一也。或以制言。或以道言。或以書言。共是義。然書名本自載道術。而分出。則畢竟是歸制道。此序以教法為樞要。故篇中曰道。曰術。曰方。皆與

以上の理由により、この慶應義塾図書館所蔵本(175-94-1、175-94-

2、175-94-3) が稿本であり、この三冊の順序はB本、C本、A本となる。そして、A本に倣い、【斯道本】以下の他の諸本が写された。なお、稿本三種には『語脉解』序文は付けられていない。『語脉解』の序文とは、この書物に対して平泉が記した序文である。末尾には「天保庚子季冬下弦 東奥大槻清準撰」とある。すなわち、天保一一(一八四〇)年、『語脉解』を「卒業」してから(書き終えてから)二年後に序文が書かれたのである。

二、写本の異同について

次に、残りの(二)から(五)の諸本の関係について比較検討したい。四種の写本のうち、もつとも清書本に近いものは斯道文庫が所蔵する写本であると考えられる。以下では(二)の【斯道本】を中心に、その他の写本と比較検討する。

まず、【斯道本】の書誌情報を確認する。【斯道本】は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫所蔵(ハ22A-122-1)、寸法は二六cm×十七.五cm。全五八丁。奥書には「丁酉十月起草戊戌正月卒業」とある(A本の記載に同じ)。すなわち、天保八年(一八三七)年に書き始め、天保九年(一八三八)年に書き終えたのである。

「濱野文庫」、「麻生文庫」の印がある他、「白石良能」、「北第六心街也」、「一塵到不齋」の三つの印記模写を確認できる。その内、「白石良能」は仙台藩士、白石権太夫良能の(14)ことである。白石権太夫は書道家で、養賢堂の指南役を務めた人物である。また、前述したように【稿

本三冊」と異なり、『斯道本』には平泉による『語脉解』の序文がある。

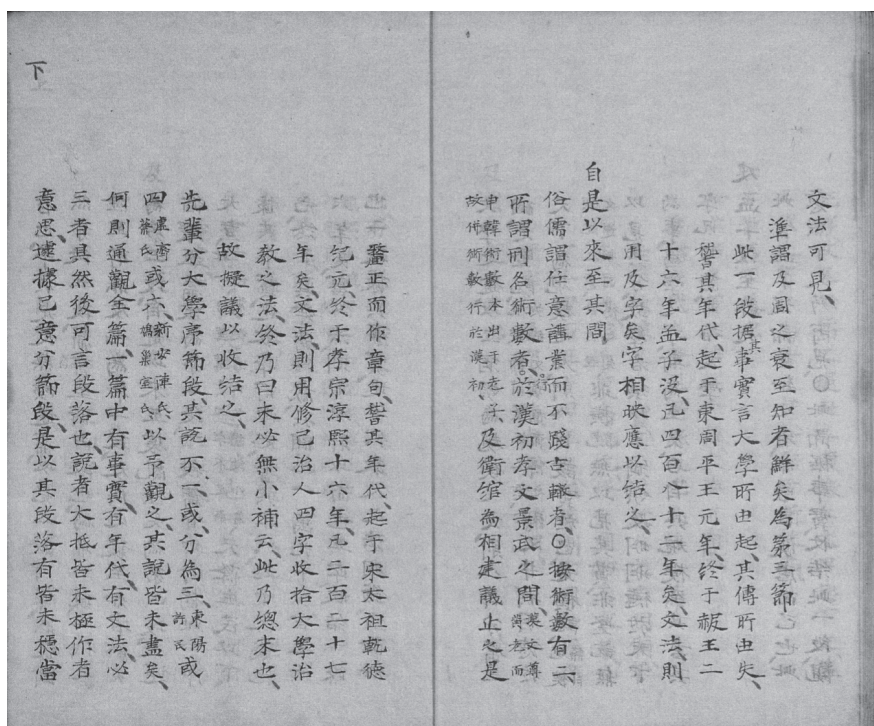
次に【斯道本】と(三) 東京都立中央図書館所蔵本(以下【都立本】とする)を比較する。【都立本】は、東京都立中央図書館特別買上文庫、坂本広太郎文庫所蔵⁽¹⁵⁾、寸法は二六cm×一七.五cm。全五八丁。奥書は「丁酉十月起草戊戌正月卒業」となっており、日付は【斯道本】と同じ。『語脉解』の序文あり。朱や句読点などの書き込みはない。

この【都立本】は【斯道本】を写したものである。史料⑪にある通り、【斯道本】には乱丁箇所が一ヶ所あり、十丁目と十一丁目の順序が逆になっている。左上には「下」の字、次の丁の同部分には「上」の字が書かれ、本来の順序が示されている。このように、史料⑪は右側が九丁裏、左側が十一丁表となっており、当然ながら文意は繋がらない。

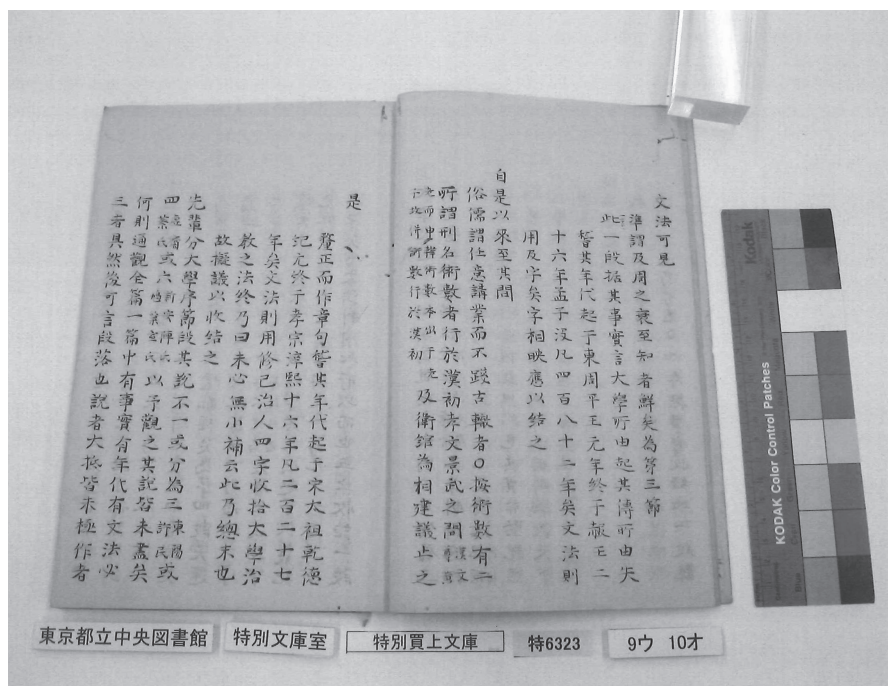
ここで、【都立本】の同箇所である史料⑫を見ると、左の丁の冒頭に「是」の字があるが、二行目からは【斯道本】の文章と同じである。「是」の字が次の丁にあるのは、史料⑪【斯道本】九行目の脱字「行」の字を【都立本】で訂正したことにより、一字ずれてしまったのである。それにも関わらず【都立本】では、二行目から、【斯道本】の乱丁箇所をそのまま写しているのである。この乱丁箇所から、【斯道本】が先に書かれ、それを写したものが【都立本】であることがわかる。

さらに、(四) 東京大学総合図書館の所蔵本とも比較する(以下【東大本】とする)。(【東大本】は、東京大学総合図書館、岡百世文庫所蔵⁽¹⁶⁾(B60-163)、寸法は二六cm×一七.五cm。全六〇丁。奥書は「乙丑夏五月初草」、すなわち、慶應元(一八六五)年である。『語脉解』

史料⑪【斯道本】



[慶應義塾大学附属研究所斯道文庫所蔵]



の序文あり。書写した人物については不明である。朱の読点あり。
この写本は他の写本とは奥書の日付が異なっている。おそらく書き写した時節を書いたものだと考えられる（慶応元年には平泉は既に没している）。大槻平泉が執筆してから二十八年後、平泉の死後にも写本が行われていた。

これら三種の写本はどれも養賢堂に関係がある。【斯道本】に印のある白石良能は養賢堂の指南役であった。【都立本】は【斯道本】の乱丁をそのまま写していることから、もとは養賢堂に関連する人物が所有していたと考えられる。【東大本】を所有していた岡百世の父、岡千仞もまた養賢堂の指南役であった。このことから、『語脉解』が養賢堂で使用されていた可能性も考えられる。

【合冊本】

最後に慶應義塾図書館所蔵の写本（以下【合冊本】とする）を見てみよう。【合冊本】は慶應義塾図書館所蔵（21060-1）、寸法は二六・七cm×一七・七cm。全五八丁。奥書には「丁酉十月起草戊戌正月卒業準記」とある。日付は【斯道本】や【都立本】と同じであるが、こちらには「準記」の記載がみえる。また、本写本は三冊に分かれていたものを合冊したものである。【斯道本】を含む上記三種にある『語脉解』の序文はない。

【合冊本】は、これまでの三種の写本とは異なる系統に属する写本と思われる。先に述べたようにこの写本には『語脉解』の序文がない

こと、また筆跡から複数人（少なくとも三人以上）による執筆であること、さらに【稿本三冊】ほど大規模ではないものの、いくつかの加筆と、文意の変更を伴う書き換えが一ヶ所行われていることがその理由である。また、【合冊本】には、「大槻文庫」の印がある。これらのことを踏まえると、【合冊本】は、『語脉解』の草稿が終わり、清書本が完成した後にも、平泉ないし大槻家によって、さらに加筆・推敲されていた可能性が考えられる。以下に順番に見ていく。

まず注目すべきは、【合冊本】四丁裏の頭注に書かれた「原本無見字」という文字である（史料⑬）。ここから、この【合冊本】が「原本」を参照して写されたことがわかる。この「原本」とは、おそらく稿本作成後に清書された本であると考えられる。上記の写本の内、もつともこの「原本」に近いものはどれか。ここで、【斯道本】を見ると、該当箇所には「見」の字はない（史料⑭）。また、【都立本】、【東大本】にも「見」はない。

史料⑬【合冊本】

人生八歳至之道

原本無見字

此詳說教人之法。○此序所云窮理者。即格物也。但格物與窮理。自有事理之異。詳傳五章解。○民可使由之。故自天子以下至於庶人之子弟。莫不

史料⑭【斯道本】

人生八歳至之道
此詳說教人之法。○此序所云窮理者。即格物也。但格物與窮理。自有事理之異。詳傳五章解。○民

一方、【稿本三冊A本】には、「見」の字が書かれているが、○が付けられて見せ消ちとなっている（史料⑮）。⁽¹⁷⁾ 見せ消ちになっていることから、「無見字」と言えないこともないが、【稿本三冊A本】は加筆が多く、清書本であるとは言いがたい。したがって、この箇所から、もつとも「原本」に近い写本は、【斯道本】であるとするのが妥当である。⁽¹⁸⁾

史料⑮【稿本三冊A本】

人生八歳至之道

此詳說教人之法。○此序所云窮理者。即格物也。但格物與窮理。自有事理之異。詳傳五章解。○民

つまり、この「見」の字は、稿本の段階で一度消されて、清書でも書かれなかった文字を、【合冊本】において再びその文字の有無について検討したものと考えられる。

次に、「原本」への加筆が【合冊本】で直された点について見る。「原本」をもつとも正確に写した【斯道本】には、誤字脱字を示す加筆以

外に、数カ所の加筆が存在する。この加筆は、【都立本】や【東大本】でも本文中に直されることはなく、加筆として書かれている。これは、「原本」に追記された文字をそのまま忠実に写したものと推測される。⁽¹⁹⁾そして、この加筆が【合冊本】では直されているのである。一例を挙げよう。

【斯道本】六丁表には、「其間凡一万九千一百三十六年矣」という本文の横に小さく「未詳或謂」の文字が書かれている（史料⁽¹⁶⁾）。それが【合冊本】では、本文中に収められ、「其間未詳。或謂凡一万九千一百三十六年矣（※傍線は筆者による）」となっている（史料⁽¹⁷⁾）。これは【稿本三冊A本】には書かれておらず（史料⁽¹⁸⁾）、稿本作成後、清書された「原本」における加筆と見られる。

【合冊本】が、この箇所を「原本」通りに加筆として写すのではなく、本文中に直して写したのは何を意味するのであろうか。それは、【合冊本】が、「原本」を超えて、さらに完成度を高めようとしたことを示すのではないか。

史料⁽¹⁶⁾ 【斯道本】

于伏羲紀元、終于舜崩、其間凡未詳或謂一万九千一百三十六年矣。文法則用此所以而也。五

史料⁽¹⁷⁾ 【合冊本】

于伏羲紀元、終于舜崩、其間未詳、或謂凡一万九千一百三十六年矣。文法則用此所以

史料⁽¹⁸⁾ 【稿本三冊A本】

于伏羲紀元、終于舜崩、其間凡一万九千一百三十六年矣。文法則用此所以而也。

もう一例、「大学章句序」の「三代之隆至有学」の部分への加筆を挙げる。史料⁽¹⁹⁾【斯道本】注釈部分二行目の「○」右横には線が引かれており、その下に「出弁謬」と書かれている。「弁謬」とは先に述べた平泉の『大学』三部作の二作目『弁謬』のことであろう。この部分は、「○」以下が『弁謬』に既に記されていることを指摘した形跡と考えられる。いずれにせよ、『語脉解』の本文には不要と判断したものと見える。

史料①【斯道本】

三代之隆至有學
此將說三代教人之法故先提此數句以概言學
校之備也。○余聞諸精里先生曰三代之隆其法
寔備說者謂教學之法到于周方全備非也果爾
則不得兼夏商謂之隆可乎因推考其說其法備
獨與之同者豈非以學制之詳夏殷共不足徵而
目焉「敗下」此在畔之學之年也「更奇」衆

【合冊本】で同箇所を確認すると、「○」以下は書かれていない（史料②）。【稿本三冊A本】には、「○」の字は見えるが、それ以降は書かれていない（史料②）。この「○」の字は続きを書くつもりで印を付けたのか、定かではない。しかし、【都立本】、【東大本】には、【斯道本】と同じく、「出弁謬」の字とともに、「○」以降の文章が書かれており、明らかに【合冊本】はこれらの写本とは異なった写し方がされている。

史料②【合冊本】

三代之隆至有學
此將說三代教人之法故先提此數句以概言學
校之備也。
人生八歲至之道
此詳說教人之法。○此序所云窮理者。即格物也。

史料②【稿本三冊A本】

三代之隆至有學
此將詳說三代教人之法故先提此數句以概言
學校之備也。○

ただし、「原本」における加筆と見られる次の一カ所は、どの写本でも本文中に直されていない。【斯道本】二十七丁裏には、「故民皆含自新之機」と小さな文字で書き加えられているが（史料②）、【合冊本】を含め、他の写本でも同じように書かれているのみである。「原本」で加筆された箇所が、【合冊本】執筆時にも直されていないのは、まだ検討を要すると考えたからであろうか、正確な理由については不明である。

史料②【斯道本】

大學章句序
 蓋德古章句序云自
 是也。○此新民之傳

さらなる推敲

さらに、【合冊本】では、加筆の反映だけではなく、文章を読みやすくするため、またはより内容を深く理解するために文意が変えられている。

もつとも大きな変更は「大学章句序」の注釈である。【斯道本】では「大学」を「三義」としているのに対し（史料②③）、【合冊本】では、「二義」となっている他、後半の文章も異なっている（史料②④）。

史料③【斯道本】

大學章句序
 大學一也、或以制言、或以道言、或以書言、共是三
 義。然書各本自載道術而分出、則畢竟是歸制道
 二義。

大学一也、或以制言、或以道言、或以書言、共是三義、
 然書各本自載道術而分出、則畢竟是歸制道二義、

史料④【合冊本】

大學章句序
 大學一也、或以制言、或以道言、共是三義。夫流以
 載道者、學者宜隨見讀、認分出、則其義自明。

大学一也。或以制言。或以道言。共是三義。又有以載道書。
 共學者宜隨見識認

【稿本三冊A本】や【都立本】、【東大本】の該当部分を確認すると、その注釈は【斯道本】のそれと同じであり、【合冊本】でのみ改変されている。これは、『大学』をどう解釈するのかを示す重要な箇所であり、この部分が書き換えられていることは留意すべきである。

さらに、【合冊本】の「蓋自天降至之也」の注釈部分には、「於生前」という加筆がある（史料⑤）。この加筆は他のどの写本にも見られず、【合冊本】独自のものである。このように、【合冊本】は、他の写本とは異なり、『語脉解』の清書が完成した後にも加筆の反映やさらなる推敲が加えられていたのである。

史料⑤【合冊本】

所以愈於堯舜者、全在于斯、則卒復不使聞矣。學者是亦須知。

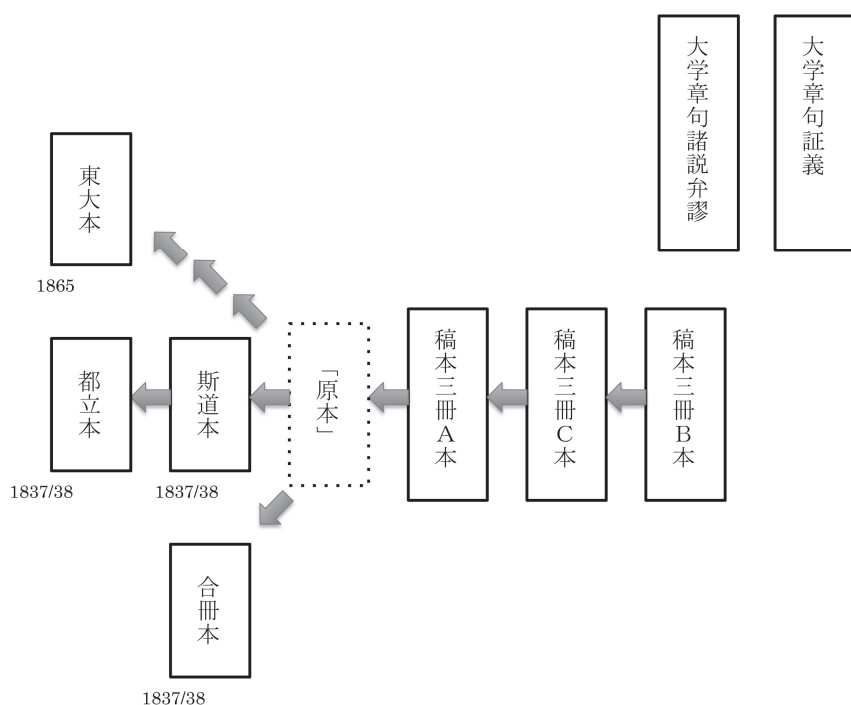
以上、四種類の写本を検討した結果、【稿本三冊A本】をもとに、「原本」により近い内容で形成された写本群（【斯道本】、【都立本】、【東大本】）と、「原本」の加筆を反映し、さらに推敲を加えた写本（【合冊本】）が存在することが明らかになった。底本とするべき写本を考えると、【合冊本】は『語脉解』序文がないことや、複数人による執筆であることなどの不確定要素が多く、底本とするには不十分である。各写本の状況から見て、もともと「原本」に近い【斯道本】を底本とするのが適切である。

第三章 今後の展望

本稿では現存する大槻平泉『大学語脉解』の写本について比較検討した。その結果、『大学語脉解』は資料①のような成立過程を経たものと考えられる。すなわち、まず【稿本三冊】がB、C、Aの順序で書かれた。その後、稿本の最終稿として清書本、いわゆる「原本」が書かれ、それに倣って、【斯道本】が書かれ、【都立本】、【東大本】と続いた。また一方で、さらに推敲を加えた【合冊本】が書かれた。以上の考察により、【斯道本】が最も「原本」に近いものと考え、これを底本として翻刻している。

今後は翻刻及び注釈を付け、内容を検討し、大槻平泉の思想の特徴や思想的な位置づけを明らかにしたい。仙台藩藩校養賢堂の中心人物であった大槻平泉の思想が明らかになることで、養賢堂の学制改革の性質もより理解が深まるのではないだろうか。

資料①



註

- (1) 鵜飼幸子「大槻家の人々」渡辺信夫（編）『宮城の研究』第五巻、清文堂出版、一九八三年、鵜飼幸子「養賢堂の学制改革について——桜田欽斎、志村篤治の反論を中心に——」『仙台市博物館調査研究報告』二二号、仙台市博物館、一九七九年、大藤修『仙台藩の学問と教育・国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書十三』大崎八幡宮 仙台・江戸学実行委員会、二〇〇九年、仙台市史編さん委員会（編）『仙台市史・通史編五、近世三』仙台市、二〇〇四年など。
- (2) 志村東嶼は仙台藩の儒者。兄五城、弟篤治とともに学業に優れ、「志村三珠樹」と呼ばれた。
- (3) たとえば、頼山陽や古川古松軒との交流が挙げられる。頼山陽は平泉に自身の著作への序文の執筆を依頼している。（濱野靖一郎『頼山陽の思想』東京大学出版会、二〇一四年）古川古松軒とは地理学について論じたことが『経世体要』に書かれている。
- (4) 『鯨史稿』については以下を参照のこと。森弘子・宮崎克則『鯨取りの社会史』花乱社、二〇一六年
- (5) 『経世体要』については稿を改めて記す予定である。
- (6) 『平泉著書序目』（宮城県図書館所蔵）による。平泉が著した孟子関連の著作の「序」が収められている。
- (7) そもそも『証義』と『弁謬』が完成した稿であるかは疑問が残る。『平泉著書目』には、『語脉解』の序はあるが、『証義』と『弁謬』の序はない。
- (8) 『平泉著書序目』の扉にはこの書物の作成に携わった人々の名前が記されている。それによれば、息子である格治（習斎）が中心となり、堀友直、石澤遠らによって作成された。彼らは平泉の弟子と思われる。
- (9) 稿本の筆記者については正確なことがわかっていない。近世において

は、本人以外の人物が代筆することは珍しくなかった（中野三敏『和本の海へ』角川学芸出版、二〇〇九年、二〇六頁）。これらの稿本も、おそらく平泉の息子ないし弟子たちが執筆し、平泉が加筆したと考えられる。

- (10) 写本名を記す際には、見やすさを考慮して隅付き括弧を用いた。

- (11) 稿本の三冊には表紙に題簽がない。なお、以下で検討する【斯道本】には題簽がある。【都立本】には題簽はなく、表紙に直接書名が書かれている。【東大本】には題簽があった跡があり、そこに直接書名が書き込まれている。【合冊本】には題簽はない。

- (12) ただし、B本で「孔氏」とされているのが、C本では「孔子」となっているが、『大学』本文を見ると、ここは「孔氏」が正しいため、転写ミスであると思われる。稿本では他にも字の異同が多くあるが、その詳細な検討、及びそれぞれの異同の意義についての検証は翻刻掲載時に行う予定である。

- (13) 「濱野文庫」は、漢学者浜野知三郎（一八七九—一九四一年）の蔵書印、「麻生文庫」は、斯道文庫の前身である財団法人の設立者麻生太賀吉（一九一—一九八〇年）の蔵書印。

- (14) 斯道文庫、一戸渉准教授よりご指摘いただいた。

- (15) 坂本広太郎は伊勢神宮の欄宜、儀式課長。教育思想関係資料を蒐集した蔵書家。生没年月日は不明。一九二五（大正十四）年に行った講演の記録『伊勢神宮の沿革』（同年発行）他、伊勢神宮に関する著作が数冊ある。東京都立図書館 Web サイト参照

＜http://www.library.metro.tokyo.jp/edo_tokyo/tokubun_guide/kaige/tbid/1016/Default.aspx＞（最終アクセス二〇一六年一月二五日）

- (16) 岡百世は、岡千仞の長男。岡千仞（一八三三—一九一四）は、仙台藩に生まれ、藩校養賢堂を経て、昌平黉で学んだ。

- (17) なお、「人生八歳至之道」の節は「大学章句序」にあるが、【稿本三冊】B本、C本には該当箇所への注釈は存在しないので検討することはできない。
- (18) 【斯道本】そのものが「原本」である可能性もないことはないが、筆記者が判別できない状況では確定できない。
- (19) この加筆について、平泉以外の人物によって書かれたために、書写者が重要でないと判断して本文中に入れなかったという見方も可能であるが、加筆部分は、より注釈の精度を高めるために書かれたと見ることができるので、本稿ではこの説を取らない。
- (20) 【都立本】には「未詳或謂」の記載はない。「其間凡一万九千一百三十六年矣」と書かれているのみである。【東大本】には、「文法或謂」と記されている。意味として「未詳」が適切であるので、【東大本】は写す際に誤ったものと思われる。
- (21) 註(17)と同様に、該当箇所は「大学章句序」内にあるため、B本、C本を参照することはできない。